

Riemann 多様体の測地線, 曲率とブラウン運動

九大 工学部 市原完治

序  $M$  を  $n$  次元, 完備, 連結, 非コンパクト Riemann 多様体,  $g$  を metric とする。そして  $\Delta_M$  を  $M$  上の Laplacian とする。

Laplacian  $\Delta_M$  を infinitesimal generator とする  $M$  上の minimal diffusion process を  $(X_t, P_x)_{x \in M}$  とおき, 今後この diffusion  $X$  を  $M$  上のブラウン運動と呼ぶことにする。

$M$  の任意の開部分集合  $U$  に対して

$$P_x(X_{t(\omega)} \in U \text{ for some } t > 0) = 1 \text{ on } M$$

が成立する時,  $M$  上のブラウン運動  $X$  は recurrent であると言われる。そして recurrent でない時, ブラウン運動  $X$  は transient であると呼ばれる。

この小論では, ブラウン運動  $X$  の recurrence, transience と Riemann 多様体  $M$  の測地線, 曲率との関係について述べる。

§1. Model  $M_0$  上のブラウン運動.

この節ではある種の特別な Riemann 多様体上のブラウン運動の recurrence, transience について整理し, 更に曲率との関係についてふかたい。

Definition I. (Greene and Wu [2])  $R^n = [0, +\infty) \times S^{n-1}$  に metric  $dr^2 + g_0(r)^2 d\Theta^2$  を付与した Riemann 多様体を Model  $(M_0, g_0)$  と呼ぶ。ただし,  $g_0(r) \in C^\infty([0, +\infty))$  は次の性質を満足する  $g_0(0) = 0$ ,  $g_0(r) > 0$  for  $r > 0$ ,  $g_0'(0) = 1$  として  $\Theta \in S^{n-1}$  spherical coordinate である。

$X_t^0 = (r_t, \Theta_t) \in [0, +\infty) \times S^{n-1}$  を Model  $(M_0, g_0)$  上のブラウン運動とする。その時ブラウン運動  $X^0$  の recurrence transience は radial part  $r_t$  の behavior だけに依存する。一方  $X_t^0$  の radial part  $r_t$  は Laplacian

$\Delta_{M_0}$  の radial part

$$\frac{d^2}{dr^2} + \frac{(n-1)}{g_0(r)} \frac{dg_0(r)}{dr} \frac{d}{dr}$$

を infinitesimal generator に持つ半区間  $[0, +\infty)$  上の diffusion process である。故に一次元 diffusion に対する結果から次の Proposition を得る。

Proposition I. 次の2条件は同値である。

- (i) Model  $(M_0, g_0)$  上のブラウン運動  $X_t^0$  は recurrent である。
- (ii)  $\int_0^{+\infty} g_0(r)^{n+1} dr = +\infty$  .

上の Proposition における量  $g_0(t)^{n-1}$  は点  $(r, \theta) \in M_0$  における volume element である。

以下の observation は曲率との関係を示唆する。

(A) Model  $M_0$  の Radial 曲率, Radial Ricci 曲率 (断面曲率, Ricci 曲率に) 関して詳細は Milnor [5]

関数  $K_0(t)$  を次の様に定義する。

$$K_0(t) = - \frac{1}{g_0(t)} \frac{d^2 g_0(t)}{dt^2}, \quad r > 0$$

$\partial_{M_0}(x_0)$  を右図の様に原点  $0$  と点  $x_0$

を結ぶ測地線の点  $x_0$  での単位接

ベクトルとする。その時  $K_0(t)$

は  $\partial_{M_0}(x_0)$  を含む点  $x_0 \in M_0$  での二次元平面の断面曲率である。

すなわち, 任意の  $0$  でなるベクトル  $X \in \partial_{M_0}^\perp(x_0) \equiv \{ X \in$

$T_{x_0}(M_0) : \langle X, \partial_{M_0}(x_0) \rangle = 0 \}$  (ただし  $T_{x_0}(M_0)$  は

$x_0 \in M_0$  での接空間,  $\langle \cdot, \cdot \rangle$  は内積) に対して,

$$K_{M_0}(\partial_{M_0}(x_0), X) = K_0(t) : \text{Radial 曲率}$$

( $K_{M_0}(\cdot, \cdot)$  は  $M_0$  における断面曲率)

さらに,  $\partial_{M_0}(x_0)$  の Ricci 曲率は

$$R_{M_0}(\partial_{M_0}(x_0)) = (n-1) K_0(t) : \text{Radial Ricci 曲率}$$

となる。

(B)  $(M_0^i, g_0^i)$   $i=1, 2$  を Model,  $K_0^i$  をその radial 曲率とする。その時次の比較定理はよく知られている。

Sturum Comparison Theorem.

任意の  $r > 0$  に対して  $K_0^1(r) \leq K_0^2(r)$  ならば,

$$\frac{1}{g_0^1(r)} \frac{d g_0^1(r)}{dr} \geq \frac{1}{g_0^2(r)} \frac{d g_0^2(r)}{dr}, \quad r > 0$$

特に  $g_0^1(r) \geq g_0^2(r), \quad r \geq 0$

が成立する。

§2. 一般の Riemann 多様体上のブラウン運動。

この節では一般の Riemann 多様体上のブラウン運動の recurrence, transience について議論する。まず §1. におけると同様に  $M$  の断面曲率, Ricci 曲率を各々  $K_M(\cdot, \cdot), R_M(\cdot)$  によって表わすことにする。

$M$  上の smooth 曲線  $m(r): [0, l(m)) \rightarrow M$  は次の 2 条件を満たす時、極小測地線であると言わゆる。

(i) 正規測地線である。すなわち

$$\nabla_{\frac{dm}{dr}} \frac{dm}{dr} = 0, \quad \left\langle \frac{dm}{dr}, \frac{dm}{dr} \right\rangle = 1 \quad \text{on } [0, l(m))$$

(ii)  $d(m(0), m(r)) = r \quad \text{on } [0, l(m))$

ただし,  $\nabla$  は共変微分,  $d(x, y)$  は 2 点  $x, y \in M$  の距離を表わす。

以上の準備の下で、我々の主定理は次の様になる。

Theorem 1. ある点  $p \in M$  に対して、次の二条件を満たす Model  $(M_0, g_0)$  が存在すれば、 $M$  上のブラウン運動  $X$  は recurrent になる。

(i) あらゆる極小測地線  $m(r) : [0, l(m)) \rightarrow M$ ,  $m(0) = p$  に対して

$$R_M\left(\frac{dm(r)}{dr}\right) \geq (n-1)K_0(r) \quad \text{on } [0, l(m))$$

$$(ii) \int_0^{+\infty} g_0(r)^{-n+1} dr = +\infty.$$

Theorem 2. Riemann 多様体  $M$  は単連結であるとする。

その時、ある点  $p \in M$  に対して、次の二条件を満たす Model  $(M_0, g_0)$  が存在すれば、 $M$  上のブラウン運動  $X$  は transient になる。

(i) あらゆる正規測地線  $m(r) : [0, +\infty) \rightarrow M$ ,  $m(0) = p$  に対して

$$K_M\left(\frac{dm(r)}{dr}, \cdot\right) \leq K_0(r) \quad \text{on } [0, +\infty)$$

$$(ii) \int_0^{+\infty} g_0(r)^{-n+1} dr < +\infty.$$

定理の証明の準備として、以下の様に記号を導入する。

$$\tau_1(\omega) = \inf \{ t > 0 : d(p, X_t(\omega)) \leq 1 \}$$

$$\sigma_\rho(\omega) = \inf \{ t > 0 : d(p, X_t(\omega)) \geq \rho \}, \quad \rho > 1.$$

$$\text{そして } \varphi_p(x) = P_x[\tau_1 < \sigma_p]$$

$$D_p = \{x \in M : 1 < d(p, x) < p\}.$$

次の定理は Ichihara [3] と同様な方法で証明することが出来る。

Theorem 3. 次の2条件は同値である。

(i)  $M$  上のブラウン運動  $X$  は recurrent である。

$$(ii) \lim_{p \rightarrow +\infty} \int_{D_p} \|\text{grad } \varphi_p\|^2 dV = 0.$$

( $dV$  は  $M$  の Riemannian volume)

故に Theorems 1, 2 を証明するには Theorem 3 の条件 (ii) を確かめるのは十分であるが、そのためには微分幾何から若干の準備を必要とする。下に簡単に説明する。

Cut loci (Kobayashi and Nomizu [4])

$x \in M$  に対し

$$S_x = \{X \in T_x(M) : \langle X, X \rangle = 1\}$$

そして  $X \in S_x$  に対して

$$\mu(X) = \sup\{t > 0 : d(x, \exp_x(sX)) = s \text{ for every } s \in (0, t)\}$$

$$\tilde{C}(x) = \{\mu(X)X : X \in S_x \text{ and } \mu(X) < +\infty\}$$

$$C(x) = \exp_x \tilde{C}(x) \quad \text{とおく.}$$

この  $C(x)$  を 点  $x \in M$  の cut locus と呼ぶ。

その時次の性質が成り立つ。

(\*)  $C(x)$  の measure は 0 である。

(\*)  $E = \{tX : 0 \leq t < \mu(X), X \in S_x\}$  とおく.

その時  $\exp_x : E \rightarrow M \setminus C(x)$  は微分同型となる.

Theorem 1 の証明.

まず次の様な関数を定義する.

$$\psi_p(r) = \frac{\int_r^p g_0(s)^{-n+1} ds}{\int_1^p g_0(s)^{-n+1} ds}, \quad r \in (1, p)$$

$$\Psi_p(x) = \psi_p(d(p, x)).$$

その時

$$\Psi_p(x) = \begin{cases} 1 & \text{if } d(p, x) = 1 \\ 0 & \text{if } d(p, x) = p. \end{cases}$$

そして  $\Psi_p(x)$  は Lipschitz continuous である.

故に Dirichlet 原理を適用することにより

$$\int_{D_p} \|\text{grad } \psi_p\|^2 dV \leq \int_{D_p} \|\text{grad } \Psi_p\|^2 dV$$

が成り立つ. だから  $p \rightarrow +\infty$  の時に右辺が 0 に収束することを示せばよい.

$C(p)$  を  $p$  に対する cut locus とすると, 性質 (\*) により,

$$\int_{D_p} \|\text{grad } \Psi_p\|^2 dV = \int_{D_p \setminus C(p)} \|\text{grad } \Psi_p\|^2 dV$$

(以下, 簡単のため  $p$  に関して " $\mu(\odot) \geq 1$ ,  $\odot \in S^{n-1}$ " を仮定する)

そして性質 (\*) から, 指数写像  $\exp_p$  によって接空間  $T_p(M)$

へ引戻すことにより,

$$= \int_{S^{n-1}} d\Theta \int_1^{\mu(\Theta) \wedge p} \left( \frac{d\psi_p(r)}{dr} \right)^2 G(r, \Theta) dr$$

ここで  $G(r, \Theta) = \sqrt{\det(g_{ij})(r, \Theta)}$ ,  $g = g_{ij} dx_i dx_j$ , として  $d\Theta$  は  $S^{n-1}$  上の一様測度である。

さて一方 Theorem 1 における利率に関する仮定の下で, Laplacian comparison theorem, Greene and Wu [2] を適用することにより, 任意の  $\Theta \in S^{n-1}$ ,  $r \in [0, \mu(\Theta))$  に対して

$$\frac{1}{G(r, \Theta)} \frac{\partial G(r, \Theta)}{\partial r} \leq \frac{(n-1)}{f_0(r)} \frac{df_0(r)}{dr}$$

を得る。故に  $r, \Theta$  に無関係な正定数  $C$  が存在し

$$G(r, \Theta) \leq C \cdot f_0(r)^{n-1}$$

$\Theta \in S^{n-1}$ ,  $r \in [0, \mu(\Theta))$  となる。

以上から 我々は

$$\begin{aligned} \int_{D_p} \|\text{grad } \Psi_p\|^2 dV &= \int_{S^{n-1}} d\Theta \int_1^{\mu(\Theta) \wedge p} \left( \frac{d\psi_p}{dr} \right)^2 G(r, \Theta) dr \\ &\leq C \cdot \int_{S^{n-1}} d\Theta \int_1^p \left( \frac{d\psi_p}{dr} \right)^2 f_0(r)^{n-1} dr \\ &= \frac{C \cdot |S^{n-1}|}{\int_1^p f_0(r)^{-n+1} dr} \xrightarrow{p \uparrow +\infty} 0 \quad (\text{条件(ii)より}) \end{aligned}$$

を得る。故に Theorem 3 から結論を得る。  $\square$



Theorem 2 の証明. まず Theorem 2 の仮定 (i) の下で,  $\exp_p: T_p(M) \rightarrow M$  は微分同型となる. この事実を利用し, 評価した  $\text{Dirichlet}$  積分を接空間上の積分に直す.

$$\int_{D_p} \|\text{grad } \varphi_p\|^2 dV = \int_{S^{n-1}} d\Theta \int_1^r \|\text{grad } \varphi_p\|^2 G(r, \Theta) dr$$

よして (右辺)  $\geq \int_{S^{n-1}} d\Theta \int_1^r \left(\frac{\partial \varphi_p}{\partial r}\right)^2 G(r, \Theta) dr$   
となる. ここで Schwarz の  $S^{n-1}$  下等式<sup>!</sup> を利用することにより

$$\geq \int_{S^{n-1}} d\Theta \frac{1}{\int_1^r G^{-1}(r, \Theta) dr}$$

を得る.

一方 Theorem 2 の条件 (i) の下で, Hessian comparison theorem, Greene and Wu [2] を適用することにより, 任意の  $r > 0$ ,  $\Theta \in S^{n-1}$  に対して,

$$\frac{1}{G(r, \Theta)} \frac{\partial G(r, \Theta)}{\partial r} \geq \frac{(n-1)}{g_0(r)} \frac{dg_0(r)}{dr}$$

を得る. 故に Theorem 1 の証明におけると同様に正定数  $C$  が存在し,  $G(r, \Theta) \geq C \cdot g_0(r)^{n-1}$ ,  $(r, \Theta) \in [0, +\infty) \times S^{n-1}$  となる.

$$\begin{aligned} \text{以上から } \lim_{p \rightarrow +\infty} \int_{D_p} \|\text{grad } \varphi_p\|^2 dV &\geq \lim \int_{S^{n-1}} d\Theta \frac{1}{\int_1^r G^{-1}(r, \Theta) dr} \\ &\geq \frac{C \cdot |S^{n-1}|}{\int_1^{r_0} g_0(r)^{-n+1} dr} > 0 \end{aligned}$$

故に再び Theorem 3 を適用すれば結論を得る  $\square$

### §.3 例

この小節ではいくつかの例を通して、前節で得られた定理の応用について説明する。

I.  $M$  を  $n$  次元 Riemann 多様体,  $K(x)$ ,  $x \in M$  を  $M$  の Gauss 曲率とする。その時次の Proposition と Theorem 3 の系として証明することが出来る。

Proposition 2. (Blanc and Fiala [I])  $M$  の total absolute curvature が有限

$$\int_M |K(x)| dV(x) < +\infty$$

ならば,  $M$  上のブラウン運動  $X$  は recurrent になる。

証明. Cut locus の性質 (\*) (\*\*\*) により, 固定点  $p$  に関する geodesic polar coordinate  $(r, \theta)$  で

$$\int_M |K(x)| dV(x) = \int_{M \setminus \{p\}} |K(x)| dV(x) = \int_{S^1} d\theta \int_0^{\rho(\theta)} |K(r, \theta)| g(r, \theta) dr$$

と出来る。

一方  $(r, \theta)$ ,  $\theta \in S^1$ ,  $r \in (0, \rho(\theta))$  における Gauss 曲率

$K(r, \theta)$  は次の様に表わされる。(Struik [7])

$$K(r, \theta) = - \frac{1}{g(r, \theta)} \frac{\partial^2 g(r, \theta)}{\partial r^2}$$

故に

$$\int_M |K(x)| dV(x) = \int_{S^1} d\theta \int_0^{\rho(\theta)} \left| \frac{\partial^2 g(r, \theta)}{\partial r^2} \right| dr < +\infty$$

となる。ここで,

$$C(\theta) = \int_0^{\mu(\theta)} \left| \frac{\partial^2 g(r, \theta)}{\partial r^2} \right| dr < +\infty \quad \text{a.a. } \theta$$

とおく。その時  $r < \mu(\theta)$  に対し

$$\begin{aligned} \left| \frac{\partial g(r, \theta)}{\partial r} \right| &\leq \left| \int_0^r \frac{\partial^2 g(s, \theta)}{\partial s^2} ds \right| + \left| \frac{\partial g(0, \theta)}{\partial r} \right| \\ \frac{\partial g(0, \theta)}{\partial r} &= 1 \quad (\text{Struik [7]}) \text{ となるから,} \\ &\leq \int_0^r \left| \frac{\partial^2 g(s, \theta)}{\partial s^2} \right| ds + 1 \leq C(\theta) + 1 \end{aligned}$$

故に  $g(0, \theta) = 0$  だから

$$g(r, \theta) \leq \int_0^r \left| \frac{\partial g(s, \theta)}{\partial s} \right| ds \leq (C(\theta) + 1)r$$

を得る。

$$\text{ここで} \quad \psi_p(r) = \frac{\log(p/r)}{\log p}, \quad r \in (1, p)$$

$$\bar{\psi}_p(x) = \psi_p(d(p, x))$$

とおけば、Theorem 1 の証明におけると同様の理由によつて

$$\begin{aligned} \int_{D_p} \|\text{grad } \psi_p\|^2 dV &\leq \int_{D_p} \|\text{grad } \bar{\psi}_p\|^2 dV \\ &= \int_{S^1} d\theta \int_1^{\mu(\theta) \wedge p} \left( \frac{d\psi_p}{dr} \right)^2 g(r, \theta) dr \\ &= \int_{S^1} d\theta \int_1^{\mu(\theta) \wedge p} \frac{1}{r^2} g(r, \theta) dr / (\log p)^2 \\ &\leq \int_{S^1} d\theta \int_1^p (1 + C(\theta)) \frac{1}{r} dr / (\log p)^2 \\ &= \left\{ 2\pi + \int_M |K| dV \right\} \cdot \frac{1}{\log p} \rightarrow 0 \\ &\quad \text{as } p \rightarrow +\infty \end{aligned}$$

故に Theorem 3 の (i), Proposition 2 の結論を得る  $\square$

2.  $I$  におけると同様  $M$  は 2次元 Riemann 多様体,  $K(x)$  は  $M$  の Gauss 曲率 とする.

(i) ある一英  $p$  に関して

$$K(x) \geq - \frac{1}{d(p, x)^2 \log d(p, x)}$$

があるコンパクト集合の外で成り立つならば,  $M$  上のブラウン運動  $X$  は recurrent になる.

(ii) Riemann 多様体  $M$  は単連結, Gauss 曲率は至る所非正であるとする. その時, ある一英  $p$  に関して

$K(x) \leq - \frac{1 + \varepsilon}{d(p, x)^2 \log d(p, x)}$ ,  $\varepsilon$  は正定数  
があるコンパクト集合の外で成り立つならば,  $M$  上のブラウン運動  $X$  は transient になる.

(i) の結果は Milnor [6], Greene and Wu [2] の一般化, として (ii) は彼等による.

(i) の証明. Theorem 1. の条件 (i) (ii) を満足する Model  $(M_0, g_0)$  を構成すればよい. そのために, 関数  $K_0(r) \in C^\infty([0, +\infty))$ ,  $\leq 0$  を次の二条件を満たす様に定義する.

(i) ある正定数  $C$  に対して

$$K_0(r) = - \frac{1}{r^2 \log r} \quad \text{on } [C, +\infty)$$

(ii)  $K_0(d(p, x)) \leq K(x) \quad \text{on } M.$

そして  $g_0(r) \in C^\infty([0, +\infty))$  を次の Jacobi 方程式の一意的な解とする.

$$\begin{cases} \frac{d^2 g_0(r)}{dr^2} = -K_0(r) g_0(r) \\ g_0(0) = 0, \quad \frac{dg_0}{dr}(0) = 1 \end{cases}$$

その時  $K_0(r)$  に関する仮定から " $g_0(r) > 0$  on  $(0, +\infty)$ " が従う。

故に我々はこの  $g_0$  から Model を構成できる。この Model が

Theorem 1 の条件 (i) を満たすのは明らかである。条件 (ii);

$\int^{\infty} g_0(r)^{-1} dr = +\infty$  は Milnor [6] の議論に従って確かめること

が出来る。まず  $g_1(r) = r \log r, r \geq c$

$$K_1(r) = -\frac{1}{g_1(r)} \frac{d^2 g_1(r)}{dr^2} = -\frac{1}{r^2 \log r}, r \geq c$$

とおく。

もし必要なら小さな正定数  $\varepsilon$  をかけることにより

$$\begin{cases} g_1(c) > g_0(c) \\ \frac{dg_1}{dr}(c) > \frac{dg_0}{dr}(c) \end{cases}$$

と仮定してよい。今、次の様な  $C_1 \in (c, +\infty)$  が存在すると仮定する。

$$g_1(r) > g_0(r), r \in [c, C_1)$$

$$g_1(C_1) = g_0(C_1)$$

その時  $r \in [c, C_1]$  に対して

$$\frac{d^2 g_0(r)}{dr^2} = -K_0(r) g_0(r) \leq -K_1(r) g_0(r) \leq -K_1(r) g_1(r) = \frac{d^2 g_1(r)}{dr^2}.$$

故に両辺を積分することにより、任意  $r \in [c, C_1]$  に対して

$$\frac{dg_0(r)}{dr} - \frac{dg_0(c)}{dr} \leq \frac{dg_1(r)}{dr} - \frac{dg_1(c)}{dr}$$

となり、上の仮定より

$$\frac{dg_0(r)}{dr} < \frac{dg_1(r)}{dr}, r \in [c, C_1]$$

もう一度積分することにより

$$g_0(r) - g_0(c) < g_1(r) - g_1(c), \quad r \in [c, c_1]$$

故に仮定より, 任意の  $r \in [c, c_1]$  に対して

$$g_0(r) < g_1(r)$$

が成立するが, これは矛盾である.

以上から  $g_0(r) < g_1(r) = r \log r, \quad r > c$  を得る.

故に

$$\int_{+\infty}^{+\infty} \frac{dr}{r \log r} = +\infty$$

だから

$$\int_{+\infty}^{+\infty} \frac{dr}{g_0(r)} = +\infty \quad \text{となる.} \quad \square$$

(ii)の結果は, test function  $g_1(r) = r \cdot (\log r)^{1+\frac{\varepsilon}{2}}$  を利用し, 同様の議論で証明することが出来る.

3.  $M$  は  $n (\geq 3)$  次元 Riemann 多様体とする.

(i) ある一英  $p$  に関して

$$(\text{英 } x \text{ での Ricci 曲率}) \geq \frac{(n-1)+\varepsilon}{4} \cdot \frac{1}{d(p, x)^2}, \quad \varepsilon: \text{正定数}$$

があるコンパクト集合の外で成り立つならば,  $M$  上のブラウン運動  $X$  は recurrent になる.

(ii)  $M$  は単連結, すべての断面曲率が非正ならば,  $M$  上のブラウン運動  $X$  は transient になる.

(i)の証明は test function として  $g_1(r) = (\log r)^2$ ,  $\varepsilon$  は十分大きな正定数, を利用し, 例え (ii)の証明に似た議論で出来る.

(ii) の場合は Model として  $R^n$  (通常の metric) を利用し, Theorem 2 を適用する.

4. ユークリッド空間  $R^{n+1}$  の中に埋入された超曲面

$$S_n : x_{n+1} = f(x_1, \dots, x_n)$$

を考える.

(i)  $n=2$  の場合.

(A)  $f(x_1, x_2) = x_1^2 - x_2^2$  の時,  $S_2$  上のブラウン運動  $X$  は recurrent になる.

(B)  $f$  は rotation invariant: 適当な  $f_1(r): [0, \infty) \rightarrow R^1$  によって,  $f(x_1, x_2) = f_1(r)$ ,  $r = \sqrt{x_1^2 + x_2^2}$  と表おこせる.

その時  $S_2$  上のブラウン運動  $X$  は recurrent である.

(ii)  $n \geq 3$  の場合.

$f$  は rotation invariant とする.

(A) 十分大きな  $x$  に対して

$$\left| \frac{df}{d|x|} \right| \geq C \cdot \frac{|x|^{n-2}}{\log|x|}, \quad C \text{ は正定数}$$

ならば,  $S_n$  上のブラウン運動  $X$  は recurrent である.

(B)  $\left| \frac{df}{d|x|} \right| \leq O\left(\frac{|x|^{n-2}}{(\log|x|)^{1+\varepsilon}}\right)$ ,  $\varepsilon$  は正定数

ならば,  $S_n$  上のブラウン運動  $X$  は transient である.

(i), (A) は Gauss 曲率  $K(x_1, x_2) = \frac{f_{x_1 x_1} f_{x_2 x_2} - f_{x_1 x_2}^2}{(1 + f_{x_1}^2 + f_{x_2}^2)^2}$  であることを利用し, total absolute curvature  $p''$  有限であることを示せばよい.

(i) (B), (ii) の場合は以下の様にするべき.

$f$  は rotation invariant だから,  $R^n$  の極座標  $(r, \Theta)$  によつて

$$dx_1^2 + \dots + dx_n^2 + df^2 = dr^2 + r^2 d\Theta^2 + f_r^2 dr^2$$

となる.

$$g(r) = \int_0^r \sqrt{1 + f_u^2} du, \quad s = g(r)$$

と置く  $S_n$  は  $(s, \Theta) \in$  geodesic polar coordinate

とする Model とする, metric は

$$ds^2 + g^{-1}(s)^2 d\Theta^2$$

となる. ここで  $g^{-1}(s)$  は  $g$  の逆関数である.

$$-\frac{1}{r} \int_0^{+\infty} \frac{1}{(g^{-1}(s))^{n-1}} ds = \int_0^{+\infty} \frac{\sqrt{1 + f_r^2}}{r^{n-1}} dr$$

だから, Proposition I から結論を得る.



## 文献

- [1] C. Blanc and F. Fiala, Le type d'une surface et sa courbure totale, *Comment. Math. Helv.*, 14 (1941-42) 230-233.
- [2] R.E. Greene and H. Wu, *Function theory on manifolds which possess a pole*, lecture notes, Springer, No. 699.
- [3] K. Ichihara, Some global properties of symmetric diffusion processes, *Publ. R.I.M.S., Kyoto Univ.*, 14, No. 2, (1978) 441-486.
- [4] S. Kobayashi and K. Nomizu, *Foundations of differential geometry*, II, Interscience, (1969).
- [5] J. Milnor, *Morse theory*, Princeton Univ. Press, 1963.
- [6] J. Milnor, On deciding whether a surface is parabolic or hyperbolic, *Amer. Math. Monthly*, 84 (1977), 43-46.
- [7] D. Struik, *Lectures on classical differential geometry*, Addison-Wesley, Reading, Mass., 1950.